

## 6. 子ども食堂参加者の年齢の二極化：真の地域の交流の場となるには

北澤彩可

### 1. はじめに

近年子ども食堂が急速に増え、それに伴い、子どもの貧困対策だけではなく、地域交流の場ということを大きく掲げている子ども食堂が多く存在し始めた。地域住民が年齢の垣根を超えて関わりあうことが出来る、食事を一緒に取ることが出来る場が増えていくことは、子どもや高齢者の孤食が問題視される今、必要とされることであり、地域住民がお互いに存在を認識し日常の中でも関わり合うことが出来る一つのきっかけとして役立つ。

しかし、実際子ども食堂に参加する中で、子どもは親と参加し、高齢者は高齢者で固まっている、またはボランティアの人に付き添ってもらいながら参加している、というように、地域の交流の場として機能している、というよりは、子ども食堂の中でも各々が“個”で活動しているように見えた。この現象の原因を考えた時、子ども食堂は小さい子どもと高齢者の参加者が極端に多く中高生の参加者が極端に少ない、参加者の年齢が二つに大きく分かれてしまっている、ということに気付いた。年齢の二極化である。

参加者年齢の二極化が起こっている子ども食堂は、地域の居場所であると言えるのか。多世代交流を行い、地域に開かれたコミュニティの場として子ども食堂を活用するためには、世代間のギャップを無くす(中高生の参加を促す)必要があると考える。

また、東日本大震災の際、居住者全員参加の組織である管理組合があるマンションでは、緊急時とその復興に判断、責任を持ち、合理的に対応する例が多かった。また、いざという時に機能した管理組合は、日常的に全員参加のイベントを多く行っていた。さらに、相互扶助の助ける側にまわった人は、日常的にイベント等のコミュニティの場へ多く参加した人であることも分かっている。日ごろからコミュニティの場、特に全員参加型のイベントを実施することにより、災害時の人命救助やその後の生活支援の実施が多く行われる。(齊藤広子, 2016: 111-113)ゆえに、いざという時のためにも、地域住民や近隣の人々と知り合う、関わりあうきっかけが必要となり、子ども食堂もその場の一つとして機能することが出来る。いざという時、高齢者を助けることが出来るのは、未就学児などの小さい子どもではなく、力のある中高生や大学生、大人である。そのためにも、地域の人々が集まる、交流する場には小さい子ども、高齢者だけでなく、できるだけ多くの世代の人々が参加する必要がある。

ここではまず、愛知県内 59 か所の子ども食堂を対象に行ったアンケートから、子ども食堂の参加対象年齢、参加している子どもの年齢をグラフ化し、年齢別の参加頻度のクロス表を作成し、それらから読み取れる子ども食堂の現状をまとめる。次に、実際に中高生の参加者がいる子ども食堂の活動、子ども食堂や学習支援バイトでの実体験を反映させながら、中高生の子ども食堂への参加を促すにはどうしたら良いのかを探っていく。

### 2. 調査方法

調査対象は、愛知県内の子ども食堂の運営者、参加している子どもである。運営者は 59 件、子どもは 368 件から回答を得ることができた。ここでは、以下の 5 つの項目を利用し単純集計、クロス集計と展開していく。

(運営者)

- ・子ども食堂の参加対象年齢

(子ども)

- ・参加している子どもの年齢
- ・子どもの参加頻度
- ・どんなきっかけで子ども食堂にきたか
- ・子ども食堂の好きなどころ

### 3. アンケート調査を基に

#### 3.1. 参加対象年齢と参加している子どもの年齢

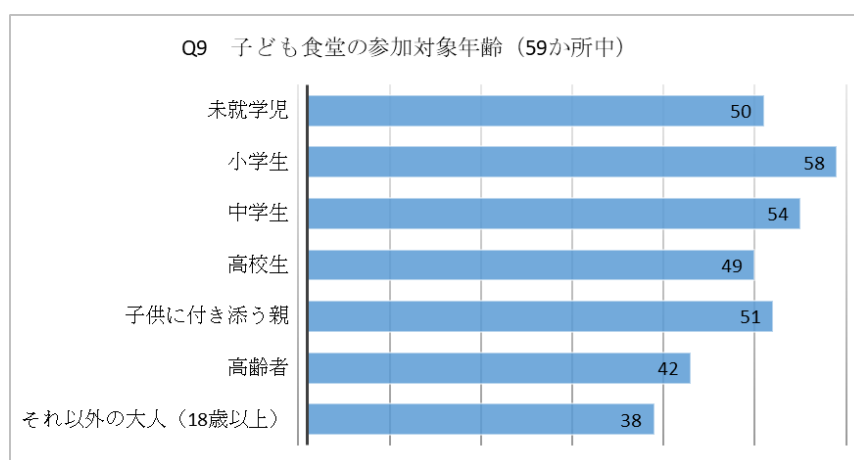


図 1

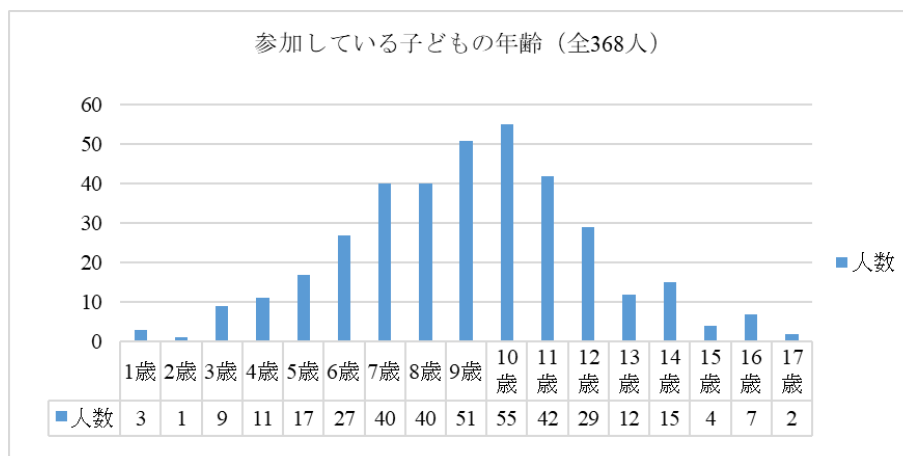


図 2

2018、2019 年に実施した愛知県内の子ども食堂を対象に行ったアンケートを基に、子ども食堂の運営者が提示している参加対象年齢と、実際に参加している子どもの年齢別の人数をグラフでまとめた。

子ども食堂が提示している参加対象年齢は全 59 か所中中学生を対象としている所は 54 か所、高校生を対象としている所は 49 か所。それに対し、子ども食堂に参加した子どもの

年齢は中学生高校生と年齢が上がるにつれ著しく低下する。(中学生は全体の 8%、高校生は全体の 2%) では、少ない中高生の参加者の参加頻度はどうなのか。クロス集計表を使い年齢カテゴリー別の子どもの参加頻度を求めていく。

### 3.2. 年齢カテゴリー別の子どもの参加頻度

表 1

年齢カテゴリー と 子どもの参加頻度のクロス表(回答がされていたもののみ)

|         |       | Q2_1   |        |       |       |       |        |       | 合計      |        |
|---------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|--------|-------|---------|--------|
|         |       | 1      | 2      | 3     | 4     | 5     | 6      | 7     |         |        |
| 年齢カテゴリー | 1     | 度数     | 32     | 14    | 5     | 0     | 0      | 16    | 1       | 68     |
|         |       | 総和の %  | 8.80%  | 3.90% | 1.40% | 0.00% | 0.00%  | 4.40% | 0.30%   | 18.70% |
|         | 2     | 度数     | 163    | 33    | 9     | 4     | 5      | 32    | 9       | 255    |
|         |       | 総和の %  | 44.90% | 9.10% | 2.50% | 1.10% | 1.40%  | 8.80% | 2.50%   | 70.20% |
|         | 3     | 度数     | 21     | 2     | 1     | 1     | 0      | 5     | 1       | 31     |
|         |       | 総和の %  | 5.80%  | 0.60% | 0.30% | 0.30% | 0.00%  | 1.40% | 0.30%   | 8.50%  |
|         | 4     | 度数     | 6      | 1     | 0     | 0     | 0      | 0     | 2       | 9      |
|         |       | 総和の %  | 1.70%  | 0.30% | 0.00% | 0.00% | 0.00%  | 0.00% | 0.60%   | 2.50%  |
| 合計      | 度数    | 222    | 50     | 15    | 5     | 5     | 53     | 13    | 363     |        |
|         | 総和の % | 61.20% | 13.80% | 4.10% | 1.40% | 1.40% | 14.60% | 3.60% | 100.00% |        |

(年齢カテゴリー : 1. 1~6歳 2. 7~12歳 3. 13~15歳 4. 16、17歳)

(子どもの参加頻度 : 1. ほとんど毎回来ている 2. 2 か月に 1 回 3. 3 か月に 1 回 4. 半年に 1 回 5. 1 年に 1 回 6. 今回が初めて 7. その他)

クロス集計をした結果としては、中高生の参加者は少ないが、ほとんど毎回来ていると答えた中高生は、小学生の 6 割を超え 7 割弱を占めていた。このことから、参加したが子ども食堂に来なくなったというわけではなく、中高生が初めて子ども食堂という場に来るといふことの壁の大きさが存在する、あるいは、小学生の時は通っていたが中高と年齢を重ねるにつれて参加しなくなったということが分かった。やはり、年齢が上がるにつれ、地域の人々が集まる場へ参加することへの抵抗感、恥ずかしさが生まれているからなのか。

では、数少ない中高生の参加者は、何をきっかけ、目的として、どこの子ども食堂に参加しているのか。4 で見ていく。

### 4. 中高生が参加している子ども食堂

アンケートを行った子ども食堂の中で、子どもの参加者 368 人中中高生は 40 人と少ない、ではその 40 人が参加している子ども食堂はどこなのか。また、その子ども食堂はどのような活動をしているのか。そこから中高生の子ども食堂への参加を促すためのヒントを探っていく。

アンケートを確認したところ、一番多く中学生が参加していた子ども食堂は尾張旭子ども食堂「おむすびや」であった。これを踏まえ、ここからはこの尾張旭子ども食堂「おむすびや」に焦点を当てていく。

#### 尾張旭子ども食堂「おむすびや」

「おむすびや」に行った子どもアンケートからは、図 3、4 のような結果が出た。

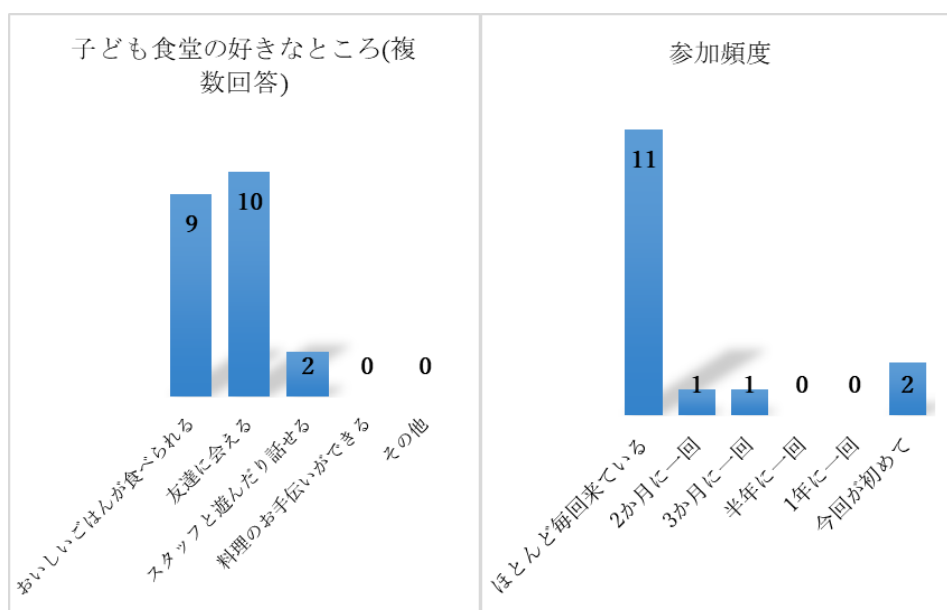


図 3

図 4

子ども食堂の好きなところはどこですかという問いに対し全体の子どものアンケート結果では、おいしいごはんが食べられるという回答が最も多かったが、「おむすびや」ではおいしいごはんが食べられるという回答よりも友達に会えるという回答が1P上回っていた。参加頻度ではほとんど毎回来ているが11人、2か月に1回が1人、3か月に1回が1人、今回が初めてが2人というように、全体のアンケート結果では7割弱だったほとんど毎回来ているという回答の割合が「おむすびや」では7割を超えていた。

尾張旭子ども食堂「おむすびや」は、子ども達への食事や居場所の提供、地域住民との出会いの機会を創出し、子ども達の生きる力を育むこと、また、関わる市民一人一人の充実した暮らしと社会づくりを目指し、週1（月3、4回）ペースで開催され、学習支援事業（尾張旭市子どもの学習支援「Link up」）を軸に活動しており、「おむすびや」に参加したきっかけとしては子ども全員が学習支援を挙げている。ここまではアンケートから得た数値やアンケートから見えたものをまとめてきたが、では、実際子ども食堂や学習支援の中で感じたこと、気付いたことはどのようなことなのか。5で論じていく。

### 5. 実体験から見えたもの

ここでは子ども食堂へ参加している中での実体験や、片親世帯の子どもを対象とした学習支援に参加し中学生と関わり感じたことをまとめていく。

まずは、子ども食堂に参加させて頂いた経験からまとめていく。二年間で計七つの子ども食堂に参加し、その中で最も感じたことは参加している子どもの年齢層の低さ、また、家族で参加している率が高いということである。中高生の参加者が少ない分、新しく中高生が参加するには少し抵抗を感じてしまう空気が存在しているように個人的には感じた。また、子ども食堂で行われるレクリエーションは小さい子ども向けのものが多く、中高生が参加するには少し恥ずかしさを感じてしまう内容かもしれないとも感じた。しかし、一度参加したことがある「びほく子ども食堂」では、子ども食堂近隣にある高校生がボランティアとし

て参加し、生き活きと活動していた。参加者としてではなくボランティアとして参加することで、子ども食堂へ参加することへの抵抗感、恥ずかしさを無くすことが出来るかもしれないと気付いた。また、「WAIWAI のわミー」では、無料で学習支援と食堂を行っており、大学生だけでなく、大人が積極的に子どもたちの勉強を見ていた。地域の交流の場として世代交流を、学習支援を通して行う良い例であると考えた。

次に、学習支援を通して実際に中学生と接する中から考えていく。学習支援に参加する子どもの中にも学習塾や習い事をしている生徒も多く（学習塾や習い事に通えるという経済状況なので貧困家庭の子どもに食事や学習支援をするという子ども食堂からの提供を本当に必要としているかは分からないが）、また、土日にも部活動の練習や大会があり忙しくしている子どもが多く、子ども食堂が開かれる土日のお昼や平日の夜は物理的に参加が難しいのではないかと感じるように感じた。また、来週友達が来るなら自分も参加する、というように、その場に友達が居るのか居ないのかということも中高生という多感な時期の子どもにはとても重要であり行動が左右されることであるというように感じた。では次に、ここまでのアンケートからまとめた数値や、中高生の参加者が多い子ども食堂、実際の経験をまとめたものから見えてきた、中高生を子ども食堂参加へ促すための自分なりの施策を述べていく。

## 6. 中高生の子ども食堂への参加を促すには

3で行った年齢カテゴリーと子どもの参加頻度のクロス集計の結果から、中高生の子ども食堂への参加率の低さは、中高生が参加している中で離れていくのではなく、子ども食堂という場へ初めて足を運ぶということの壁の大きさによるもの、あるいは小学生から中学生高校生へと学校段階が上がっていくことによって起こるものであることが分かった。これらは、地域の人々が集まる場所へ参加することに対しての恥ずかしさなどの心理的理由や時間の都合による物理的理由によるものであると考えた。では、中高生の子ども食堂への参加を促すにはどうすべきなのか。4、5で論じたものを参考にしつつ考えていく。

まずは心理的理由へのアプローチ、対策を考えていく。子ども食堂で行われているレクリエーションは小さい子ども向けのものが多く、中学生が子ども食堂へ感じる気恥ずかしさの要因の一つなのではないかと考える。実際に子ども食堂に参加する子どもは未就学児や小学生が多いため仕方がないことだが、中高生を無理にレクリエーションに参加させたり、レクリエーションだけを行うのではなく、中高生という学業が忙しく難しくなる時期の子どもには、レクリエーションの代わりにここまでの中で出てきた「おむすびや」や「WAIWAI のわミー」のように子ども食堂の活動の一つとして学習支援を行ったりすると良いのではないかと考える。無料もしくは100円という安価で食事とともに学ぶ機会、勉強を教えてもらう機会を得ることが出来、地域の人々と勉強を通して関わり合うことで、気恥ずかしさが緩和するのではないかと考える。また、埼玉県の「ひこうき雲」という子ども食堂では学生が主体となって子ども食堂を運営しており、参加者としてではなく、中高生がボランティア、運営側として参加することにより、恥ずかしさを感じることなく地域の人々と積極的な関わり合うことができるのではないかと考える。また、中学生の参加者が多い「おむすびや」で行ったアンケート結果や、学習支援事業で実際に中学生と関わっている実体験から、友達が居るといふことの重要性も見えた。友達がその場に居る、参加しているということは、子ども食堂へ参加

するかしないかの大きな決め手となる。それは同時に誰か中高生の参加者が居れば輪が広がっていき中高生の参加者の増加、安定を図れるということも意味している。そのためにはやはり食事提供以外の学習支援のような中高生が何かを得ることが出来る、恥ずかしさを感じず参加することが出来る目玉となるものが必要になる。

次に物理的理由へのアプローチ、対策を考えていく。中高生は部活動の練習や大会などにより、平日の夜や休日の昼間に開催される子ども食堂参加が難しいということに注目し、子ども食堂の開催日時変更を対策として挙げる。休日の夕方や夜は、部活動から帰ってきてお腹が空いている時間帯であり、土日は学校の課題も多く出るため最適なのではないだろうか。このように、子ども食堂への中高生の参加を促すための施策はいくつか考えられるが、それに伴い課題も見つかった。最後に、課題を挙げてまとめていく。

## 7. 見えてきた課題

子ども食堂を地域の交流の場、多世代交流の場として活用するためには今現在子ども食堂で起こっている年齢の二極化を緩和させる、無くしていく必要があり、そのために少ない中高生の参加者を増やす、参加を促す必要があるとし、参加を促すための施策を考えてきたが、その中で課題も見つかった。

施策として学習支援を挙げたが、学習支援を活動目的としてとても意識していると回答した子ども食堂は、農林水産省が行ったアンケートでは 28.8%、私たちが行ったアンケートでは 18.6%という結果だった。数値を見るとやはりまだ学習支援をしっかりと意識している子ども食堂は少なく、これから学習支援を広めて根付かせていくには時間がかかりそうである。また、施策として子ども食堂開催日時の変更も挙げたが、子ども食堂の開催日時を変更することによって、これまで参加出来ていた人が参加出来なくなってしまうという事態を引き起こしてしまうかもしれない。地域の人々が集まり多世代交流を行うための対策が、参加出来ない人を創り出してしまっては元も子もない。

子ども食堂が負担を感じることなく、今現在子ども食堂に多く参加している世代の人も通い続けながら、新たな世代の参加が促せられればとても良い交流の場、子ども食堂になっていくと感じる。今後、子ども食堂がより良い地域交流の場、相互協力のためのきっかけとなるように中高生、高齢者と対象を絞りアンケート調査を実施していきたいと考える。

### 【参考文献】

- ・公益財団法人 日本都市センター, 2016, 「人口減少における多世代交流・共生のまちづくり」齊藤広子編『多世代共生型社会にむけて 人口・世帯減少時代のまちづくりー新たな仕組みを作る必要性ー』110 - 131
- ・尾張旭子ども食堂「おむすびや」(<https://asahikodomoshokudo.wixsite.com/omusubiya> , 2019年1月25日にアクセス)
- ・福祉新聞, 2019, 「学生らが運営する子ども食堂 多世代が楽しく交流(埼玉)」(<https://www.fukushishimbun.co.jp/topics/22599> ,2019年1月26日にアクセス)
- ・農林水産省, 2018, 「子ども食堂と地域が連携して進める食育活動事例集～地域との連携で食育の環が広がっています～」(<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/set00zentai.pdf> ,2019年1月21日にアクセス)